



ろくべん館だより Vol.47 『カラムシ計画』



9月の初め頃、刈り取る



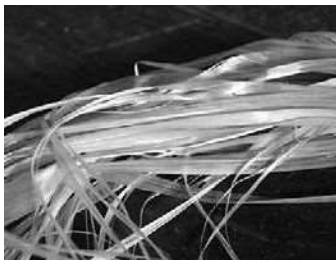
皮を剥く



外側の茶色い部分を剥いて、
内側のうす緑の繊維だけ残す



外皮を剥くのに使う道具
手前の竹のへらが大鹿で使われるもの
奥の金属製は昭和村で使われているもの



内側のきれいな繊維

ろくべん館を拠点に活動する「織姫工房」は、活動を開始してから十八年になる。この間ずっと機械織りの指導をしてくれた先生は、今年で九〇歳になる。十八年前から同い年のおばあちゃんが二人で教えてくれていたが、六年前にこの名コンビの片割れを失った。残る一人の先生はまだまだ元気で、手も口も達者である。

実は、その先生が機械織り以外にもう一つ教えてくれたことがある。カラムシから繊維を取るのだ。最初は織り機の一部に使われている縄が、長年の使用で切れてしまったことから始まった。いつも強い力で引つ張られる部分だけに、丈夫な素材が求められる。この縄の材料となるのがカラムシだった。先生の手で新しく編まれたカラムシの縄を見た時、皆そのうす緑色の縄の美しさに感嘆の声を上げた。

カラムシはイラクサ科の植物で、苧麻ちまとも呼ばれ昔から植物繊維として衣類やロープ、農作物を入れる袋などを作るのに利用されてきた。中でも繊維を細く裂いて織られたものは、上布じょうふといって光沢のある美しい布となる。「上布」とは上等な布の意で、夏用の和服に使われ、越後上布、宮古上布といわれるものがよく知られている。

上布には手が届かないとしても、先生の作った縄から皆のカラムシへの興味が湧いた。先生は自分のおばあちゃんが古希を記念して、カラムシの繊維で穀物を入れる袋を織って人に配ったのだと話してくれた。その時に自分も手伝ったのだという。そうやって代々伝えられた技術だった。

先生の家の近くに、カラムシはずっと絶えずに生えてきた。十年ぐらい前からそのカラムシを刈り、繊維の取り方を教えてもらうようになった。十年もやっていけば上手くなりそうなものだが、毎年初心者に戻っていることに気づく。先生の手は竹のへら一本を実に器用に使い、生徒のそれとはまったくの別物を生みだす。改めて先生の手技に尊敬のまなざしを向ける。こうやって自分達の下手さを苦笑しながらも、和気あいあいとする作業がまた楽しい。

数年前から参加してくれている若い人は、カラムシの一大産地である福島県の昭和村でカラムシの栽培から織りまでを学び、自分で作った素敵なバッグを見せてくれた。そこまで仕上げするには、繊維を細く裂き、つなぎ、紡いで、染めて、と根気のいる作業が続く。これも習得したい課題である。

さて、そのカラムシをこれまで先生に秋の収穫時期まで管理してもらっていたのだが、そろそろ自分達でも栽培し、増やしたいと思うようになった。昨年のカラムシが少し元気がなかったせいもある。このまま絶えてしまつては惜しい。春に芽が出てきた頃、根っこを掘つて移植することを計画している。どんな土地を好むのか、また鹿の被害にも気をつけねばならず、何年かかけて根付き増えていくように、今年からこのカラムシ計画を始めようとした。それと同時に繊維を取る技術も絶やさず伝えていけたらと願っている。

もし関心をお持ちの方がいらしたら、ろくべん館（☎3912244）までご一報を。